

《高校生のための本格ミステリ入門（日本編）》

執筆 大村 拓

第5回（最終回） 「〈新本格〉ブーム到来！」

あやつじゆきと のりづきりんたろう ありすがわありす
～綾辻行人 法月綸太郎 有栖川有栖 山口雅也 北村薫～



○「新本格」時代がやってきた!!

だから、一時期日本でももてはやされた“社会派”式のリアリズム云々は、もうまっぴらなわけさ。
(中略) ミステリにふさわしいのは、時代遅れと云われようが何だろうが、やっぱりね、名探偵、大邸宅、怪しげな住人たち、血みどろの惨劇、不可能犯罪、破天荒なトリック……。絵空事で大いに結構。要はその世界の中で楽しめればいいのさ。但し、あくまで知的に、ね。(綾辻行人『十角館の殺人』より)

時はバブル景気のまっただ中の1987年、日本ミステリ界の潮流は、彗星のごとく現れた一人の若手作家によって、大きく変えられることとなる。この人こそが、当時京都大学大学院に在学中だった綾辻行人である。彼は、当時の本格派を背負って立っていた島田荘司の熱い推薦文を得て講談社ノベルスよりデビューした。どこの新人賞を獲ったわけでもない一介の学生が、講談社という大出版社から、しかも著名作家の折り紙付きで世に出ることなど、当時の文壇の常識ではおよそ考えられな

い異例なことであった。このデビュー作が『十角館の殺人』である。この作品は、冒頭に挙げた引用に端的に表されているように、現実的な面にはまったく背を向けて、謎解きの面白さだけを追求した、遊戯性に富んだ典型的な本格ミステリであった。当時、本になるだけでも難しかったであろうこのタイプの作品を、小細工せず真っ向勝負で売り出そうとは、たいしたチャレンジ精神であった。しかし、編集者や島田らの先見の明が時代のニーズを見事に見抜き、結果として好調な売り上げを記録することとなったのである。これがいわゆる「新本格」ブームの始まりである。

綾辻の成功に自信をもった講談社は、この後、綾辻同様にずぶの素人の若手たちを次々とデビューさせていく。それが歌野晶午、法月綸太郎、我孫子武丸といった若手作家たちである。デビューの頃の彼らは、概して文章力や人間描写といった文学面では稚拙さが目立っていた。しかし一方では、若い柔軟な発想がなければ書けないような斬新なアイデアに満ちあふれており、この点において、特に同世代の読者たちから熱烈に支持されることとなったのだ。そしてこの読者の熱い支持こそが、社会派至上主義に傾きがちだった当時のミステリ文壇の空気をすっかり入れ換えてしまい、本格ミステリが再び文壇の中心に据わる時代の到来をもたらしたのである。

またちょうどこのムーブメントと時を同じくして、翻訳ミステリ出版の老舗であった東京創元社も、ほとんど実績のない若手作家たちばかりからなるハードカバーの叢書を立ち上げる。その名も『鮎川哲也と13の謎』と称した12冊のシリーズ本からは、折原一、有栖川有栖、山口雅也、北村薫といった新人作家たちが次々とデビューし、これまた個性あふれる本格ミステリを世に送り出し、本格好きの読者から熱烈な支持を得ることとなる。このように講談社と東京創元社の両社が両輪となって尽力した結果、「新本格ブーム」はゆるぎのないものとして定着し、この後も続々と才能ある若手たちが輩出してくるのである。

○「新本格」の特徴

それでは「新本格」とは、どのような特徴をもつジャンルであるのか、解説しておこう。

まず第一に、これらは典型的な本格ミステリである。魅力的な謎、名探偵による論理的な推理、結末で明かされる意外な真相といった、本格ミステリ固有の要素は、当然必須である。「新本格」の初期を支えた若手作家たちは、大学のミステリ研究会（ミス研）出身者が多く、ここで英米の黄金期本格の手法をマスターし、本格ミステリとは何かということも正しく学んできた。実際、クリスティー、クイーン、カーといった黄金期本格派の巨匠の作品は、ほとんどの人がよく読んでおり、またそのテクニックも熟知した上で、自らの作風を構築している。中でもクイーンを信奉している人が多いのが特徴で、クイーンのような華麗なロジックを目指す傾向が強い。これまでの日本ミステリ界では、本格ミステリといえばトリック重視が常識であったことを考えると、ロジック重視というのは今までにない新たな特徴といえよう。

第二に、小説世界を現実に近い近づけようとする志向が極めて弱いのが特徴である。つまり社会派とは正反対の方向性を持っている。実際、舞台はいかにも怪しげな奇怪な館や孤島や雪に閉ざされた山荘などであり、またそこで展開される事件も、密室殺人、見立て殺人、装飾された死体など、いかにも本格ミステリ的な要素（これを**ガジェット**という）を多用する。つまり松本清張以降の本格ミステリの常識であった、「リアルな世界観の中で本格的な謎解きをする」という方向性はあえてとらず、それ以前の古典的な本格ミステリに先祖返りしているといえる。しかし優れたロジックを駆使して書かれた作品は、意外に古臭く感じることはなく、むしろ精緻なロジックだからこそ表現することの出来る新鮮さがある。

逆に欠点として挙げられるは、文章表現、人物描写、思想性といった文学面において未熟さが目立つことであろう。通常プロ作家になるには、少なくとも文学的な才能がなければならないのがそれまでの常識である。しかし、「新本格」作家たちは皆まだ成熟前にデビューしてしまった感があるので、その点においては大いに物足りない。実際当時の文壇からは、この点を激しく批判され、バッシングに近い状況すらあったという。批判的な人たちにすれば、「松本清張先生がせっかく大人の読み物として認知されるまでに質を高めてくれたミステリを、再びそれ以前の見世物小屋のような馬鹿馬鹿し

い世界に逆戻りさせるのか」といった思いがある。それゆえ、激しい反発を感じたのであろう。しかし「新本格」の真骨頂は、むしろ若々しく斬新な発想力、知的な論理性などにあるのであり、文学性などはむしろ犠牲にしてでもそちらを優先させようとする、ぶれない姿勢にあった。結果として、われわれは優れた発想にもとづく独創性に満ちた数々の傑作を読むことが出来るようになったのである。また最初は、文学性に欠けることの多かったこれらの若手作家たちも、作を重ねるたびに徐々に上達してきて、ついには味わいのある文章を書くまでに成長してきている。

あれから四半世紀が経過した今日においても、わが国は創意に満ちた本格ミステリが、次々と生み出されてくる世界でも稀有な国となっている。考えてみれば日本人は、アニメ、コミック、ゲーム、フィギュアなど元来、子ども向けの文化を大の大人たちが大真面目に追求し、ついには「クール・ジャパン」として、世界に誇れる立派な文化に成長させてしまった。本格ミステリにおける「新本格」の発展ぶりも、まさにこのクール・ジャパンの一翼を担うものであることは、間違いない。

それでは以下に「新本格」初期を代表する、5人の作家を取り上げ、それぞれの代表作について解説してみよう。

1. 綾辻行人 ◎『十角館の殺人』（★913 ア 講談社）（1987年＝昭和62年）

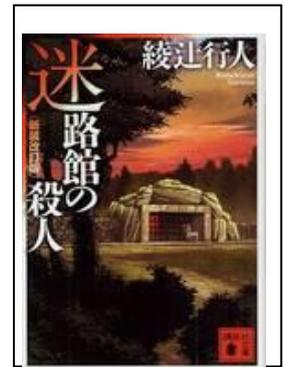


【内容】 十角形の奇妙な館が建つ孤島・角島^{つしま}をK**大学ミステリ研究会の7人のメンバーが訪れた。ここは、かつて館の設計者・中村青司を巻き込んだ陰惨な四重殺人事件の現場となった、いわくつきの島なのであった。そんな中、学生たちが一人、また一人と殺されていく。互いに疑心暗鬼とないながら、ミステリ・マニアの学生たちは、得意の推理で真犯人をつきとめようとするのだが…。一方、本土でもミステリ愛好家の僧侶・島田潔らが、四重殺人事件の真相を突き止めるべく捜査を開始する。果たして真相解明までに学生たちは生き残れるのか!?

これが新本格時代の幕開けを告げた、綾辻行人（1960- ）の衝撃のデビュー作である。孤島に集まったメンバーが次々と殺されていく設定は、言うまでもなくクリスティーの名作『そして誰もいなくなった』（★933 ク 早川書房）を踏まえたものである。また島に上陸した学生たちは、互いに敬愛するミステリ作家の名前をニックネームとして呼び合っているのだが、そのニックネームとは、「ポウ」、「カー」、「エラリー」、「アガサ」、「ヴァン」、「ルルウ」、「オルツイ」である。（これまで本稿で本格ミステリの歴史を学んできた皆さんなら、それぞれ誰を指すかは一目瞭然でしょう。）以上のような設定を見ただけでも、本作は海外の本格ミステリを読み慣れたマニアに向けて書かれた作品であることがわかるだろう。つまり何の実績もない無名の新人作家が、いきなりミステリ上級者に挑戦しようというのである。ならば受けて立ちましょと、上級者のやる気に火をつけてくれるのだが、著者が読者に仕掛けた巧妙なトリックとミスディレクションは、彼らの予想をもはるかに上回るものであった。とりわけ終盤にたった1行で示される真相は、おそらくすべての読者の想像を超えるものであろう。誰もが「やられた！」と叫ぶはずである。そしてこんなミステリこそ、本格ミステリ・ファンが長らく待ちわびていたものだったのだ。ここに「新本格」ブームの到来が告げられたのである。

綾辻は、本作の登場人物たちと同様、京都大学在学中にはミステリ研究会に所属しており、その間、上級レベルの会員たちの厳しい目を意識しながら、それをさらに上回るものを書こうと、腕を磨いてきたという。つまり小説書きとしては未熟者だったとしても、少なくとも本格ミステリのテクニックを駆使する能力については、しっかりと鍛えられた一人前の腕をもっていたのである。このアンバランスなまでの技巧の突出ぶりが、強烈な個性となって読者を魅了していく。そしてこのような立ち位置こそが、まさに「新本格」を象徴するものといえるだろう。

彼はこの後、「〇〇館の殺人」というタイトルに統一したいいわゆる館シリーズを現在まで9作品執筆しており、著者を代表する人気シリーズとなっている。これらは名探偵役の僧侶・島田潔が、建築家・中村青司が建てた奇想に満ちた館で起こる殺人事件を解明していくという物語だが、ゲーム性の強い◎『迷路館の殺人』（★913 ア 講談社）や、『十角館の殺人』の趣向をさらにスケール・アップさせた大作◎『時計館の殺人』（★913 7 1.2 講談社）などは、その総合力においては、このデビュー作をしのごレベルに達していると言っていいだろう。また館シリーズには属さないが、◎『霧越邸殺人事件』（★913 ア 1.2 角川書店）も、奇怪な館が抜群の存在感を見せる本格ミステリの力作である。これらの作品は、オーソドックスな本格ミステリというよりは、本格ミステリとホラー小説の理想的なハイブリッドという面をもっている。これは綾辻という作家の持ち味が本来ホラー向けであることを示しているのであろう。一方、純本格ミステリに徹した作品は意外と少ないが、そのタイプの代表作としては、エラリー・クイーンばりのロジックを前面に押し出した◎『殺人方程式』（★913 ア 講談社）が挙げられよう。また短編〇「どんだん橋、落ちた」（◎『どんだん橋、落ちた』（★913 ア 講談社）所収）は、いかにもミス研出身らしさが感じられる超絶技巧を駆使した犯人当て小説である。



2. 法月 綸太郎 ◎『一の悲劇』（★913 / 祥伝社）（1991年＝平成3年）



【内容】 山倉家に突然、長男誘拐の知らせが入った。しかし実際に連れ去られたのは近所に住む富沢家の息子だった。犯人は子供を取り違えたのか？ 山倉家の父親は犯人の指示に従い、身代金六千万円の受け渡しに赴くが失敗、人質は遺体で発見されてしまう。やがて容疑者が浮上するものの、その人物には強固なアリバイがあった。なんと事件当日は名探偵にして作家の法月綸太郎と一緒にいたというのだ。怒濤のドンデン返しで読者を翻弄する誘拐物の傑作！

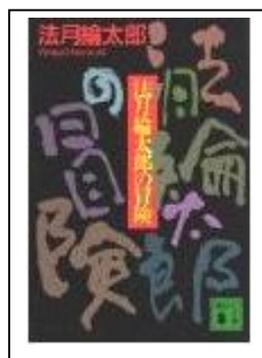
法月綸太郎（1964- ）は、綾辻行人に次いで島田荘司の推薦付きでデビューした、京大ミス研出身作家第2号である。彼の作品で名探偵役を務めるのは、ミステリ作家を職業とする作者と同名の法月綸太郎である。独身者の綸太郎は、警視庁に勤める父親・法月警視と二人暮らしをしており、父親が担当する難事件の捜査に協力し、見事な推理で謎を解くというのが基本設定である。これは名探偵エラリー・クイーンとその父親クイーン警視との関係とそっくりであることは一目瞭然で、彼の作風がクイーンの強い影響を受けていることの表れである。実際ロジックを重視したアクロバティックな推理は、クイーンの後継者と呼ぶにふさわしい。ただし綸太郎は、初期のクイーンのように人間味に乏しい推理マシンのような存在ではなく、被害者に感情移入しながら、悩み苦

しむ性格なので、後期のクイーンに近い存在だといえよう。

さて本作であるが、現在再ブレイク中で売り上げ実績も好調な法月の代表作である。人質が取り違えられた誘拐事件を、それに巻き込まれた主人公の視点から描き、息つく暇もない緊迫のストーリー展開が最大の魅力である。読み出したら止まらない圧倒的な面白さをもっている。そして度重なるどんでん返しの果てに明かされる真相の意外性は、凄まじいものがある。

また家庭の悲劇を全体的に暗いタッチで描いている点や、主人公山倉のいささか無鉄砲な行動ぶりなどには、ハードボイルド小説の影響が見られる。ハードボイルドとは、アメリカで独自に発達したミステリの一ジャンルであり、謎解きよりも探偵の行動描写や感情を排した乾いた文体を特徴とするものである。本作は、ハードボイルド作家の中でもとりわけ本格ミステリ・ファンから評価されることが多いロス・マクドナルドの影響が強く見てとれる。これは法月の他の作品にも共通して見られる特徴である。(ロス・マクドナルドはアメリカの推理作家で通称「ロスマク」。◎『さむけ』や◎『ウィッチャリー家の女』(ともに★933マ 早川書房)は特に、本格ミステリとしても楽しめる。)

一方、法月の最大の欠点は、極端に執筆スピードが遅いことであり、なかなか新作にお目にかかることのできないファンは、我慢強く次作を待っているしかない。しかしこれは逆に、一作一作丁寧に作り込まれていることを意味するので、書かれた作品はどれをとっても安心して読める信頼のブランドとなっている。そのため代表作を一作に絞り込むのは意外と難しく、初期の長編なら本作とともに、やはり家庭の悲劇を描いた◎『頼子のために』(★913ノ 講談社)が双璧であり、また近年の作では10年ぶりにかかれた長編◎『生首に聞いてみる』(★913ノ 角川書房)の評価が高い。また短編の名手でもあり、○「死刑囚パズル」(◎『法月綸太郎の冒険』(★913ノ 講談社)所収)や○「都市伝説パズル」(◎『法月綸太郎の功績』(★913ノ 講談社)所収)は、著者の代表作と言うにとどまらず、本格短編ミステリ史上に燦然と輝く傑作と言って過言ではない。



3. 有栖川有栖 ◎『双頭の悪魔』(★913ア 東京創元社) (1992年=平成4年)



【内容】 英都大学推理小説研究会の女性部員マリアは、心の傷から大学を飛び出し、四国山中に孤立する芸術家たちの村・木更村に潜伏するようになった。そんなマリアを連れ戻すべく、推理小説研究会の面々は木更村を訪ねたが、住民たちは立ち入りを拒否。業を煮やした一行は降りしきる大雨をついて木更村への潜入を決行することとなる。かくして、ついに江神部長がマリアとの再会を果たしたのも束の間、村に至る橋が濁流に押し流されて、彼らは川の両側に分断されてしまう。そして、双方で起きた殺人事件に巻き込まれた彼らは、それぞれに真相解明に挑むことに…。

有栖川有栖（1959- ）は、東京創元社からデビューした人で、エラリー・クイーンから多大なる影響を受けた「新本格」作家陣の中にあつて、とりわけその影響が強い作家である。つまり有栖川作品の主眼は、クイーン同様、基本的に誰が犯人かを推理すること（＝フーダニット）のみにあり、物語は犯人を推理するために必要なデータをちりばめるための場としてのみ存在価値をもつ。そして読者は作家が提示したデータを正しく推理しさえすれば、確実に唯一無二の真犯人にたどり着ける仕組みになっているのである。ただし本家クイーンは、エレガントなロジックと意外性に満ちた真相を両立させるという難業を実現していたのに対し、有栖川は、意外性の面にはさほどこだわらず、純粋なロジックを展開することのみに専念している。そのことにより逆に、ロジックの美しさだけを純粋に味わうことができ、この点に限れば、最も本家クイーンに肉薄した存在であると言ってもよいだろう。そんな有栖川作品の中でもとりわけロジックへのこだわりが強く、国名シリーズや四大悲劇といったクイーンの初期作を彷彿とさせるのが**江神部長シリーズ**である。このシリーズは英都大学推理小説研究会の**江神二郎部長**が探偵役を務め、クイーン顔負けの名推理を披露するもので、有栖川の真価が遺憾なく発揮された傑作ぞろいのシリーズなのである。

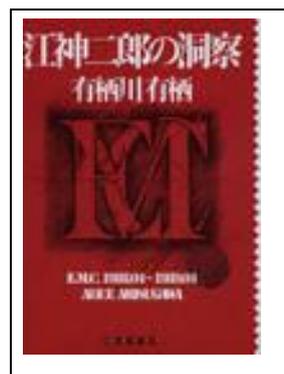
本作は、そんな江神部長シリーズの第3弾にして、有栖川の最高傑作である。橋の崩落によって孤立した二つの村で起こった殺人事件を、それぞれのサイドで知恵を振り絞って犯人を推理する趣向である。他から隔離された村という状況は、雪の山荘や孤島などと同様の特徴をもっており、一般に**クロード・サークル**と呼ばれている。まさに、本格ミステリの王道ともいえるこのような状況設定の中、真っ向勝負で犯人当てに挑戦しているのである。さらになんと本家クイーンでおなじみの「読者への挑戦状」が三度も挿入されるという徹底ぶりを見せている。読者は作者の挑戦に応じて、心ゆくまで推理に没頭してみよう。

また本作は、主要登場人物たちがすべて大学生であるため、若者たちの微妙な心理なども巧みに描くことで、一種の青春小説としての楽しみ方もできるようになっている。とは言っても、本作の眼目はあくまでも犯人当てにあるので、恋愛描写などはあえて控え目にしてある。このあたりのバランス感覚の良さが、この作家の美点の一つでもある。

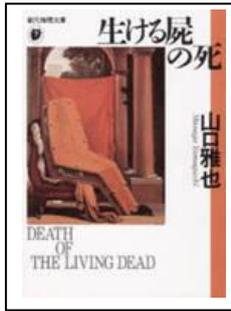
この江神部長シリーズは、これまでのところ◎『**月光ゲーム**』（★913ア 東京創元社）（処女作で「鮎川哲也と13の謎」の一冊）、◎『**孤島パズル**』（★913ア 東京創元社）（第2作）、本書『**双頭の悪魔**』、◎『**女王国の城**（上・下）』（★913ア 1.2 東京創元社）（15年ぶりの江神もの）の4長編と短編集◎『**江神二郎の洞察**』（★913アリ 東京創元社）が発表されているだけである。

（ちなみに本作は前作の設定を受けて書かれているので、出来るだけ書かれた順番に読んでほしい。）読者の評価が格段に高いシリーズなのに、これほどまでに作品数が少ないということは、ミステリ作家にとって美しいロジックの作品を書くのはそれほどエネルギーを消耗するということなのだろう。

一方、有栖川の生み出したもう一人の名探偵・臨床犯罪学者の**火村英生**を主人公とするシリーズは、あえてガチガチのロジックにはこだわらず、かなり気楽に書いているシリーズである。そのため作品数はこちらの方が圧倒的に多いが、その品質においては、江神部長シリーズよりは劣ると言わざるをえない。そんな中、◎『**乱鴉の島**』（★913ア 新潮社）だけは江神部長シリーズに負けないレベルの推理の醍醐味が満喫できる逸品である。



4. 山口雅也 ◎『生ける^{しかばね}屍の死』(★913 ヤ 東京創元社) (1989年=平成元年)



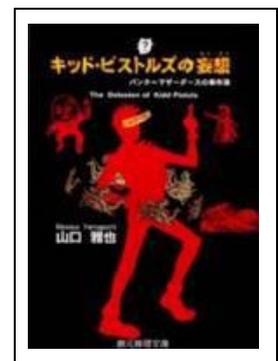
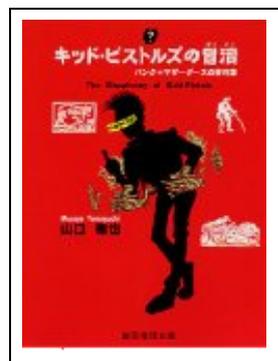
【内容】 舞台は、死者がよみがえるという奇怪な現象が続発するアメリカ・ニューイングランドの田舎町。霊園経営者一族の屋敷に滞在していた一族のパンク青年・グリーンは誤って毒を口にして死んでしまうが、ご多分に漏れずよみがえる。自ら死者となったことを隠しつつ事件を追うグリンの前に、不可解な殺人事件が次々と起こり、謎は深まるばかり。生と死の境界があいまいになった特異な世界で、グリーンははたして一連の事件の真相を突き止めることが出来るのか!?

本作は、「鮎川哲也と13の謎」の一冊として刊行された、山口雅也(1954-)の衝撃のデビュー作である。とにかく、設定があまりにも奇抜である。なんと死んだ人間が普通によみがえってしまうという、ありえない世界観を前提としているのだから。だからといってけっしてホラー小説などではなく、れっきとした本格ミステリであるので安心してほしい。まず冒頭で名探偵役を務める主人公のパンク青年グリーンが殺されてしまうが、すぐに生き返るという前代未聞の展開で幕が開く。彼は自分を殺した犯人を突き止めようと決心するのだが、ただし一度死んだ人間の肉体は徐々に腐敗していき最後には消えてしまうという設定なので、その時までには、謎解きを終えなければならないのだ。つまり探偵自身がゾンビなのだ。こんな意表を突く設定のもと、次々と関係者が殺されていき、そして次々とよみがえる。そもそも死んだ人間が生き返るのなら、殺す必要はないではないか。もはや解決不能と思えるほど入り組んだ謎は、しかし最後には驚くほど論理的に解かれるのだ。

死者が次々とよみがえるという恐ろしくも騒々しい設定は、オカルト趣味を得意としたディクソン・カーを思わせるし、巧みに忍ばせた数々の伏線を拾い集め、読者の盲点を突いた論理を駆使して真相を解いてみせる手腕は、クイーンを思わせる。山口自身、自分の好みを称して「クイーンは正妻、カーは愛人」と言っているように、本作はまさに両巨匠の血統を継ぎ、本格ミステリの王道を行く堂々たる作品となっているのである。

一方、アメリカを舞台とした翻訳小説のような雰囲気と、また巨編ともいえるほどの分厚い中身は、正直言っていささか読みにくい。しかし途中で投げ出さず、是非とも最後まで読み通してほしい。これほどまでに独創性に富み、なおかつ本格ミステリとして完成している作品は、古今東西そうあるものではない。本書は「新本格」勃興以降に書かれたミステリの中でも、一二を争う傑作と言ってもよい作品なのである。これを読まずに本格ミステリは語れないと言っても過言ではなからう。

山口雅也は、このデビュー作のように、異世界を扱うのが得意な作家である。「探偵士」なる職業が警察よりも権威をもつというパラレル・ワールドの英国を舞台としたキッド・ピストルズ・シリーズにもその特徴がよく表れている。このシリーズの第1短編集の◎『キッド・ピストルズの^{ぼうとく}冒険』や第2短編集の◎『キッド・ピストルズの妄想』(ともに★913 ヤ 東京創元社)は、おなじみのマザーグース物ともなっており、山口のもう一つの代表作である。



5. 北村薫 ◎『空飛ぶ馬』(★913 キ1 東京創元社) (1989年=平成元年)



【内容】 落語好きの女子大生「私」は、近世文学の加茂先生の紹介で、あこがれの噺家・春桜亭円紫と会うことになった。この時、加茂先生が語った、幼少時代に何度も見たという不思議な夢の話の陰に隠された意外な真相を鮮やかに解き明かしてくれたのだ。この出会いをきっかけとして、「私」の身近なところで起こったちょっと不思議な出来事の実相を、円紫はいつもただ聞くだけで、優しく解きほぐしてくれるようになる。文学の香気あふれる、全5編から成る連作短編集。

本作は、「鮎川哲也と13の謎」の一冊として刊行された北村薫(1949-)のデビュー作であり、「日常の謎派」とよばれる、本格ミステリの一ジャンルを創始した画期的な作品である。

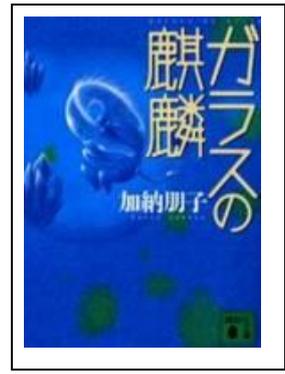
本作で探偵役を務めるのは、落語家の春桜亭円紫師匠。彼は落語の腕も一流だが、人間性に対する洞察力も抜群で、主人公の女子大生「私」が毎度持ち込んでくる、彼女の身の回りで起こったちょっと不思議な出来事の実相を、話を聞くだけで瞬時に解き明かしてくれるのだ。この形式は典型的な安楽椅子探偵ものであるのだが、これまでの安楽椅子探偵とはひと味違う。なぜなら、ここで解かれる謎は、どれをとっても犯罪といえるようなレベルにない日常の謎ばかりであるからだ。たとえば、喫茶店で女子高生たちが、注文した紅茶に口もつけず砂糖を何杯も入れ合っているのはなぜかとか、幼稚園に寄贈された木馬が一夜のうちに消えてしまったのはなぜかとか。およそ派手さに欠けるこれらの謎も、円紫の手にかかると、たちどころに人生の機微や人間性の奥深さを垣間見せる魅力的な謎に転じるのだ。

これはまさに文学と言うべき内容なのだが、円紫の推理は小さな伏線を拾い集めて論理的に組み立てていくものであるため、同時に本格ミステリとしても立派に成立しているのである。つまり日常の謎を接点とすることで、文学と本格ミステリを見事に融合させているわけだ。この両者の融合ということに関しては、連城三紀彦が先駆者であることは、前回(《高校生のための本格ミステリ入門(日本編)》第4回)で詳述したところであるが、北村の手法は連城のものとはかなり違う。連城は、文学的な物語を冷徹なロジックで逆転させてしまう手法を得意としており、読者は一見思い込まされていた登場人物の行動の背後に、信じられないような打算的な動機が隠されていたことを知る。つまり文学性が意外性を、演出するための道具になっているわけだ。一方、北村のミステリで解かれるのは、あくまでわれわれの身の回りに普通に存在する人間の日常的な行動の背後に隠された深層心理である。青春時代のまっただ中に生きる高校生の皆さんは、家族や友人のちょっとした言葉や行動、あるいは表情などの真意を読み取れず、誤解したり苦しんだりすることがよくあるのではないだろうか。このような人間の行動の背後に隠された真実の感情を知りたいと思うのは、誰でも同じで、円紫はそんな読者の願望を満たしてくれる存在なのだと言える。彼が解き明かす人間の感情は、時には人の優しさを実感させてくれるような暖かなものもあれば、悪意や敵意をちらりとのぞかせる冷たいものもある。しかしこれらを知ることによって人は人間的に成長するのであり、つまるところ、これこそが文学の目的そのものと言ってよいのである。つまり北村ミステリは、謎を解くことそれ自体が文学的行為となっているのである。

これは北村が、元高校の国語教師をしていたことと大いに関係が深いだろう。この手の作品は、作者自身に人間性に対する深い理解と、それを言葉で表現できる文学的才能がなければなかなか書けないものだが、デビューが30代と遅咲きの人であったので、人生経験も豊富で、また職業柄からも、最初からそれらが備わっていたわけである。

また主人公の女子大生は、名前が明かされない「私」となっている。これはつまり読者に自らと主人公を重ね合わせることを容易にさせるための手法なのだ。「私」は、円紫の推理を聞くたびに、人間性の真実への理解が深まり、人間的に成長していく。そして、これは同時に読者自身が、この作品を読み進めていくに従い人間的に成長していくことにもなるのだ。

このような北村の作風は、「日常の謎派」とよばれ、以後多くの追随者を生み出していくこととなる。そんな中、北村の影響を最も強く受けているのが、北村と同じく東京創元社からデビューした加納朋子であろう。北村の作風が気に入った人は、まず加納の代表作◎『魔法飛行』(★913カ 東京創元社)や◎『ガラスの麒麟』(★913カ 講談社)あたりを読んでもよいだろう。一見よく似た両者ではあるが、よく読んでみるとその肌触りには若干の違いがある。そんな違いを探しながら読んでみるのも楽しいだろう。



なお円紫シリーズは、本作の後、続編ともいえるべき好短編集◎『夜の蟬』(★913キ2 東京創元社)が発表されその後、長編2冊と短編集1冊が刊行されている。そのうち長編の◎『六の宮の姫君』(★913キ4 東京創元社)は、日常の謎ではなく、『源氏物語』の文学解釈が謎解きのテーマとなっており、さすがにここまで来るともはやミステリと言うには苦しくなる。このように、本来文学的資質にあふれた人であるだけに、近年の北村の仕事は、めっきり文学方面に傾いてしまっており、本格ミステリの創作は極めて少ない。本格ミステリ・ファンとしては、残念なところである。



以上のように「新本格」とは、ガチガチの犯人当てから「日常の謎派」まで、実に守備範囲の広いものだということがわかる。このことが「新本格」が廃れることなく、この後もますます発展していくことにつながっていくのである。



◎ミニ特集 その後の「新本格」

以上、ここまで「新本格」最初期の第一世代ともよばれる人たちを紹介してみた。しかし「新本格」の魅力を知ってもらうためには、これだけではいささか物足りない。そこでここではミニ特集として、20世紀までにデビューした第二世代以降の人たちも紹介してみよう。

京極夏彦は、妖怪の世界と本格ミステリを結びつけた◎『姑獲鳥の夏』(★913キ 講談社)でデビューした。これは陰陽師兼古本屋の中禅寺秋彦(通称・京極堂)が探偵役を務める百鬼夜行シリーズの第1作にあたる。このシリーズの画期的なところは、妖怪の存在を否定することなく、合理的に謎を解決するところにある。通常、怪異現象と合理的解決は相反するものであり、それまでの本格ミステリでは、一見妖怪の仕業と見える現象を、妖怪の存在を全否定することで、どう科学的に解明するかが推理のミソであった。しかし京極堂はあくまで妖怪の存在を前提としながら、関係者に取りついた憑き物を払う行為を通じて、事件自体を解決してしまうのである。これは民俗学に関する深い理解があればこそなせる業である。伝統的な日本社会に妖怪がどのような意味をもって存在してきたのか、という民俗学的知見に



立つことではじめて事件は深層から理解され、解決が可能になるのである。このシリーズは、すべて妖怪の名前がタイトルについた「〇〇の×」（〇〇に妖怪名が入る）というタイトルに統一されているが、その中でも最高傑作の呼び声が高いのは、連続バラバラ殺人事件と箱詰めにした少女の謎を追う◎『**魍魎の匣**』である。次いで女学校における連続殺人の謎を追う◎『**絡新婦の理**』（ともに★913キ 講談社）の評価が高い。京極作品は、どれもノベルズ版にして弁当箱かと見間違ふほどの分厚さを誇る超大作ぞろいなので、じっくりと腰を落ち着けて読んでみよう。



西澤保彦は、現実にはありえないSF的な設定の中、特殊なルールに基づいて、合理的な解決に導く作品を得意としている。このタイプの作品の中で、特に出来がいいのが、同じ一日を9回繰り返すという設定の◎『**七回死んだ男**』（★913ニ 講談社）、玉突き式に人格が入れ替わってしまうという設定の◎『**人格転移の殺人**』（★913ニ 講談社）、一定量のアルコールを摂取することで瞬間移動が可能になるという設定の◎『**瞬間移動死体**』（★913ニ 講談社）の3作である。これらは一見して馬鹿馬鹿しいような設定ではあるが、いずれも特殊ルールをきっちりと踏まえながら真面目に論理を展開し、なおかつ意外な解決に導いている点は、本格ミステリとして高く評価できる。一方、SF的手法を使わずに、純粋に推理する楽しさを味わわせてくれるのが、酒好き大学生・**匠千暁**（通称タック）が探偵役を務める**タック&タカチ**・シリーズである。おなじみの大学生たちが酒を片手に推理に興じるこのシリーズは、推理の楽しさのみならず、レギュラー陣たちの性格描写の楽しさも相まって、魅力的な作品に仕上がっている。また当初はただ賑やかなだけだった作風も、後には複雑な人間関係や青春のほろ苦さや葛藤を描くようになり、青春小説としての魅力も加わってきている。初期の代表作は意外性に富む◎『**彼女が死んだ夜**』（★913ニ 幻冬舎）で、後期の代表作は◎『**依存**』（★913ニ 幻冬舎）である。特に後者は、若さゆえの過剰なまでの自意識が痛々しく、読者の胸にも激しく突き刺さってくる。

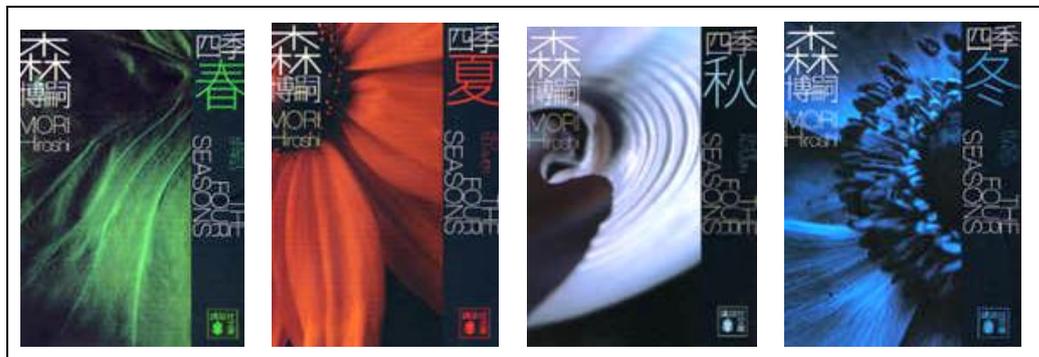


森博嗣は、理系ミステリの書き手として、大変人気のある人である。森の作風が理系ミステリとよばれるのは、大学の工学部が舞台となっていることや工学的なトリックを多用する点にあるが、動機を極端に軽視した作風もまた「理系」と称されるゆえんであろう。初期のシリーズで探偵役を務めるのが、国立N大学・工学部建築学科助教授の**犀川創平**である。（ちなみにこのシリーズは、主人公二人の頭文字をとってS&Mシリーズとよばれる。）彼は学問においても事件捜査においても、実に頭の切れる人物であり、クールすぎるほどの冷徹な推理と独創的なものの見方で事件を解決に導く。そして助手を務めるのが建築学科の学生・**西之園萌絵**である。彼女も犀川には及ばないが極めて頭脳明晰で、しかもとびきりの美貌を誇る。さらに非常なお金持ちというから、一見感情移入しづらいキャラクターのようにみえるが、どこかバランスを欠いた性格や犀川を一方向的に恋慕する健気な姿に可愛げがあり、嫌味な印象はない。実はこの二人の関係がどう展開するかという興味も本シリーズの読みどころの一つである。また不可能犯罪を多用し、大胆なトリックが

炸裂する作品群は、本格ミステリとしても申し分のない出来を誇っている。特にデビュー作の◎『すべてがFになる』(★913モ 幻冬舎)は、大胆なトリックとそれまでになかった斬新な世界観で、森を一躍人気作家に押し上げた。本シリーズは特に力作が多く、中でも◎『幻惑の死と使途』(★913モ 講談社)は、脱出マジックの最中に行われた効果抜群の密室殺人トリックが秀逸な傑作である。



またS&Mシリーズに次いで、極貧の自称科学者・瀬在丸紅子^{せざいまるべにこ}が探偵役を務めるVシリーズ(紅子の頭文字Vによる)が書かれていくが、レギュラー・キャラクターの魅力は、前シリーズにもひけをとらない。このシリーズの代表作は◎『魔剣天翔』(★913モ 講談社)で、空中からの犯人消失トリックが見事に決まっている。もしこのS&MシリーズとVシリーズを気に入ったなら、四季シリーズ4作(◎『四季 春』◎『四季 夏』◎『四季 秋』◎『四季 冬』)(いずれも★913モ 講談社)まで読んでみることを強くお勧めする。読者の楽しみのためはつきりとは言えないが、この両シリーズの背後に隠された意外な関係に、目の玉が飛び出るほどの驚きを味わえることだろう。



麻耶雄嵩^{まやゆうたか}は、綾辻行人や法月綸太郎と同様、京大ミス研出身の作家である。その出自からして想像できるように、本格ミステリについての高い理解力を有し、実際デビュー当時から、本格ミステリ・マニアの予想のさらに上に行くような問題作ばかりを書いてきた。これは本格ミステリの技法を完全に理解した人にだけできる業であり、すなわちデビュー当時から上級者向けの作家であったのである。その型破りな作風は、絵画ならキュビズムのような抽象画、音楽ならば12音階を使った現代音楽にたとえることもできよう。とりわけデビュー作の◎『翼ある闇』や第2作の◎『夏と冬の奏鳴曲』(ともに★913マ 講談社)は、提示された謎を解決するという本格ミステリの様式そのものに対する独特の問題意識が突出しており、一般読者には理解しがたいところも多々あって、賛否両論が噴出した。たとえばこの2冊には、自らを「銘探偵」と称するメルカトル^{メルカトル}鮎なる人物が登場するのだが、その人を食ったような名前や意図的にリアリズムから遠ざけたような不自然な人物設定など、当たり前の名探偵像とは明らかに一線を画している。これは、麻耶がその限界も含めて本格ミステリを深く知り尽くしているからこそ、かえって当たり前すぎる本格ミステリは書くことが出来なかった、ということなのだろう。しかしこのようにエッジの立った創作姿勢も、時とともに徐々に丸くなってきて、近年の作品は随分と読みやすくなってきている。実際、毎年恒例の年間ベスト選びでは、このところ上位ランクの常連組になっており、これも一般からの理解を得られるようになった結果だと言える。しかしそうは言っても、今でも一筋縄にはいかない風変わりな本格ミステリばかりを書いていることには違いない。たとえば、自らは一切推理をせず、すべて使用人にやらせるという前代未聞の名探偵が登場する貴族探偵シリーズの2作(◎『貴族探偵』、◎『貴族探偵対女探偵』(ともに★913マ 集英社))



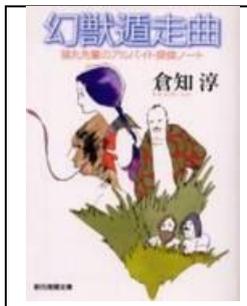
や、神様が冒頭で犯人を名指ししてしまうところから話が始まる◎『さよなら神様』（★913 マヤ 集英社）など、麻耶がオーソドックスな名探偵像に対して、明確な問題意識を持ち続けていることは変わっていないようだ。



私の一押し!!

例によってこのコーナーでは、一般的評価とは関係なく、私が個人的に偏愛する作品を紹介していきたい。

◎倉知淳 ◎『^{げんじゆうとんそうきょく}幻獣遁走曲』（★913 ク 東京創元社）（1999年＝平成11年）



【内容】ある時は猫コンテストのスタッフ、またある時は新薬の臨床治験の実験台、さらには珍獣アカマダラタガマモドキの捜索隊員、戦隊ショーの怪人役に松茸狩りの案内人、と毎回一風変わったアルバイトに明け暮れる神出鬼没の名探偵・猫丸先輩が遭遇した5つの事件。猫コンテスト会場での指輪盗難事件を描いた「猫の日の事件」、意外な真相が爽やかな余韻を呼ぶ「たたかえ、よりきり仮面」など全5編を収録した、愉快的な連作短編集。

本作は、猫丸先輩が探偵役を務める連作短編集である。猫丸先輩とは、小柄で童顔、前髪を長く垂らした髪型と子猫そっくりなまん丸な眼が特徴の30代前半の男性である。しかし見た目の可愛らしさとは反対に、その性格は結構食えない人物である。人を小馬鹿にしたような口ぶりで後輩の八木沢をいたぶる様子は、相当意地悪だ。にもかかわらずその飄々とした性格はどこか憎めないものがある。大学を出た後も定職に就かず、様々なアルバイトを経験し、後輩にアルバイトの世話をさせても悪びれることなく悠々と世を渡っている様子は、自由人そのもので、どこかうらやましくもある。一方、意外と観察眼は鋭く、誰も気づかなかったささいな手掛かりから不可解な事件の謎を解決してしまう手腕は、立派に一流の名探偵と言ってよい。このように誠に個性あふれる猫丸先輩は、私の愛してやまない名探偵の一人である。本作はそんな猫丸先輩の魅力が最大限に発揮された第2短編集である。特に本作では、毎回意表をつくアルバイトとして登場してくるので、その設定だけでも愉快でならない。正直言うと、本格ミステリとしてはやや論理に隙が見られるのだが、それもまたご愛敬。ほのぼのとした世界観は、読む人を幸福な気分にしてくれることだろう。特に私のお気に入り、○「たたかえ、よりきり仮面」。今回のバイトはデパート屋上で行われる戦



ショーの怪人役。炎天下の中、しかも客もまばらなステージにもかかわらず、仲間との絆を大切にしながら、意外にも真剣に取り組んでいる猫丸先輩らの姿は結構感動的で、フリーターも捨てたものではないと認識を改めさせてくれる。ヒーローの衣装の中につけられていたガムの謎を解くという、典型的な「日常の謎派」に属する作品だが、猫丸先輩の解き明かす解決は、ほんわかと人情の温かさを感じさせるものだった。

倉知淳（1962- ）は、猫丸先輩ものの第1短編集◎『日曜の夜は出たくない』（★913 ク 東京創元社）でデビューした人である。「新本格」作家の中にあって、特にロジックがさえていなくてもないし、北村薫のように文学面に秀でていなくてもない。それでも飄々とした伸びやかな世界観は、この人にしか書けない強烈な個性となっている。その特徴が最もよく発揮された猫丸先輩シリーズは、デビュー作と本作の他には、唯一の長編◎『過ぎ行く風はみどり色』（★913 ク 東京創元社）と短編集◎『猫丸先輩の推測』（★913 ク 1 講談社）と◎『猫丸先輩の空論』（★913 ク 2 講談社）が刊行されている。ミステリとしての出来は、どれも大差があるわけではないが、いずれも猫丸先輩の魅力がたっぷりと味わえるので、是非これらも読んでみてほしい。



【注】1.◎『 』で表したものは、当時あるいは現在でも出版されている本の書名です。

○「 」は、小説の題名です。

2.★で表したものは、習志野高校図書館が所有している本です。NDCも表記します。

3.小説の内容については、書体を違えています。

《高校生のための本格ミステリ入門（日本編）》参考文献

『日本ミステリー事典』権田萬治・新保博久監修（新潮社）

『日本ミステリーの100年』山前謙（光文社）

『東西ミステリーベスト100』[1986年版] 文藝春秋編（★901 ブ 文藝春秋）

『東西ミステリーベスト100』[2014年版] 文藝春秋編（★901 ブン 文藝春秋）

『金田一耕助 the Complete』別冊ダ・ヴィンチ編集部編（メディアファクトリー）

『僕たちの好きな金田一耕助』別冊宝島編集部編集（宝島社）

『ミステリーの魔術師 高木彬光・人と作品』有村智賀志著（北の街社）

『名探偵・神津恭介読本』浅草紅堂本舗（同人誌）

『鮎川哲也読本』芦辺拓・有栖川有栖・二階堂黎人編（原書房）

『本格ミステリ・フラッシュバック』千街晶之他著（東京創元社）

『西村京太郎読本』郷原宏編（KSS出版）

『本格ミステリ・クロニクル300』探偵小説研究会編著（原書房）

『本格ミステリ・ベスト100 1975-1994』探偵小説研究会編著（東京創元社）

2015.02.06 更新